

## 板金

# 對馬慶二さん

日野自動車株式会社

車両生技部品品質課

つしま・けいじ ●1952(昭和27)年青森県生まれ。高校卒業後、日野自動車(株)入社。試作車の板金部品の製作からボディー組み立てにかけて優れた技能と知識をもつ。特に、手板金による平板から三次元形状打ち出し板金作業において卓越した技能をもち、新しい技術の習得や普及にも取り組む。平成23年度東京都優秀技能者(東京マイスター)。特級工場板金技能士。趣味は日曜大工、貯金箱集め。



## 日本のモノづくりに貢献したい

對馬さんが生まれ育った青森県五所川原市は、津軽平野のほぼ中央に位置し、冬には地面に降り積もった雪が風によって吹き上げられる「地吹雪」が発生する厳寒の地です。小さい頃からものづくりが好きだった對馬さんですが、小学校の冬休みの宿題に電気ストープを作ったと言います。

中学校卒業後、職業訓練所(現在の職業訓練校)の自動車整備科に1年通い、修了後は地元自動車修理工場に就職しました。そこで4年間働く間に夜間の高校に通いました。自動車整備科を選んだのは、友達から誘われたのが理由で、たまたまです。その訓練所には電気、機械、溶接、自動車などの科があり、本当は電気をやりたいと思っていました。中学の頃はラジオを組み立てたりするのが好きだったので、電気のほうが向いているかな、と。ただ当時は、高度経済成長期で一般の人も車をもてるようになった時代であり、私も車に対する興味はありましたね。

子どもの頃は古い時計をばらしたりして遊んでいました。父は洋服の仕立屋で、壊れたアイロンが家にあり、そのアイロンのニクロム線などを使って簡単な電気ストープを作りましたが、学校の先生には「おまえが作ったものじゃないだろう」と言われ、評価されませんでした。子どもが作るにはは

出来がよすぎたんでしょうか。父とは畑は違いますが、職人の気質は受け継いでいたのかもしれませんが。

失敗を繰り返しながら、徐々に技術が身に付いていきました。仕事が嫌になった時期もありましたが、上司の気配りもあり、「もう少し頑張ってみよう」と思い直します。

地元の修理工場では、最初の3カ月はぶつかった車のバンパーをはずす仕事を毎日やっていました。4カ月目からは、修理工場の先輩から「車を直せ」と言われたのですが、先輩は何も教えてくれませんが、ですから先輩の作業を見られるのですが、そうすると先輩に怒られる。「あっち行け」と。自分の技術が盗まれるのが嫌なんです。あっち行けと言われても、私は何をしたいのかわかりません。先輩の作業を盗み見て、少しずつやってみて、失敗して、怒られながら仕事を覚えました。そこで技術の地下ができたのかなと思います。本当に一切教えてくれないんです。見るのも怒られる。日野自動車に入ったとき、仕事を教えてくれることにびっくりしました。

日野自動車の入社は1973(昭和48)年、採用担当の方が夜間高校にみえたのが、入社のおきっかけです。地元で修理工場で板金の経験があったせいか、板金の試作部門の配属になりました。

仕事上辛いと思った記憶はありませんが、仕事が嫌になったことはありません。

す。24、25歳の頃です。仕事があまくいかない、自分が思ったようにものを作れない時期がありました。もうこれ以上は仕事を続けるのは無理かなと思いい、田舎へ帰って、仕立屋の仕事を継ごうと思いましたが。母に電話したところ、「帰ってきてもおまえのやる仕事はない。帰ってこなくていい」と言われてしまいました。父の時代は既製品の服が少なく、オーダーメイドの服が多かったため商売もできたのですが、もうそういう時代ではないと、母は感じていたのだと思います。

その頃は正直、ずる休みをしたこともありました。当時は寮生活をしていたので、上司がすぐに寮に迎えに来て、いろいろと話を聞いてくれました。風邪をひいた時などは、おかげを持ってきてくれたりと、面倒見がよかったですね。

以前は、試作車が衝突実験などに数多く使われていましたが、今はコンピュータの評価が進み、試作車の代わりになっている面もあります。しかし、1丁化が進んだ今でも、技能の伝承は重要と考えています。部内では、板金の技能伝承グループも設けています。

入社以来、板金と部品の品質検査の仕事をやっていました。板金の面白さは、平らなものから立体的なものを作り上げるところです。また、これから開発する車の具現化は、全く何もない状態からものを作っていく面白さがあり



加工① バスの前扉のアウター（外側）加工①  
（海外技術指導）  
図面をもとに現地作業への作業説明



加工② 同 加工②  
ハンマーなどを使い金属板に段をつける（折り曲げる）。曲げの加工は、板金の基本的作業であるが、コーナー部に亀裂が入らぬよう、熟練した技能が必要



加工③ 同 加工③  
曲げ箇所を平らに、歪みがないように正確に加工する。平面に近い曲率の少ないドアパネルは特に難しい



加工④ 同 加工④  
形状は問題ないか最終確認をして完成。このあとバスのボディーに取り付ける



ダブルキャブ（トラックで室内シートが2列になっている車種のこと）のボディーの、歪みなどの修正

ますね。やはり車が完成するとうれしいです。町なかで自分が手がけた車が走っていると、見ていて楽しいですね。今は主に、教育、技能検定（国家検定）関係の仕事をしています。一つの目標として、社員は技能検定試験を受けます。私自身も1996（平成8）年に板金の特級技能検定試験に合格しました。特級を取るのには苦労しました。何しろ難しいので、通信教育を受けるなど1年半くらいかけて勉強しました。今は技能検定委員をしているため、私が社員に直接、試験に関する指導ができないのが少し歯がゆいです。技能の継承の面では、機械化が進んで、今ではあまり使われないような技術は教えなくてもよいのか、それとも

知識として教えたほうがよいのか、そのあたりの判断が非常に難しく悩んでいます。ただ基本的なところはきちつと理解していないと、物の善し悪しの判断がつかえません。これはどうやって作っているのかを理解していないと、問題点がわからないのです。また、自動車製造は総合作業なので、一つの部品の知識だけをもつていてもだめで、車全体の構造をよく知っていないといけません。小さな部品を作るにしても、なぜこの部品がここに付くのかを理解して仕事をしないといけません。

仕事で最も求められるのは「センス」と話す対馬さん。お客様が何をほしがっているのかを感じ取って、ものを作っていくことが大事です。そして、日本のモノづくりに少しでも貢献したいと思っています。

現場では、設計図を示された時に、ここはこうしたほうが良い、こういう作り方をしたほうが良いと、注文をつける技量が求められます。また作ったものが「スマートな」ことも重要です。材料のつなぎ目をいかにセンスよく、かつこよく、違和感がないように見せるか。センスはもともと備わっていることもありませんが、磨かれていくものだと思います。

今の日本では、技能者の掘り起こしが必要だと感じています。技能検定委員をやらせてもらっている関係もありますが、検定試験に大企業、ただでな

く、町工場の職人がもつと参加できるようにしなければいけません。それには実技の講習会の開催が必要だと思います。町工場の職人は大企業と違って、実技を教えてくれる人がなかなかいない。町工場が「一級板金技能士の店」といった看板を掲げれば良い宣伝になるのではないのでしょうか。

将来は技能五輪\*の出場選手の育成ができればいいなと思っています。その選手たちが、のちのち後輩の指導をしていく、といった夢ももっています。

仕事柄、若い人と接する機会が多い対馬さんは、「若者は、どんどん悩んでほしい」とメッセージを送ります。

高校を卒業して何をやるうかなど、いろいろ考えました。母の知り合いがハワイでレストランを経営していたので、料理人はどうだろう、大学生活も謳歌してみたい…など。結局、日野自動車に入社しましたが、勉強したいの思いから、入社後に夜間大学に入りました。ただ、大学が都心にあるので通うのに時間がかかり、仕事との両立が大変になったため、休学しました。また学校に行きたくなったら、転職して通えばいいと。いろいろ悩んだ結果、働くことを優先しました。

自分で決めた以上は、二者択一ではないけれど、選んだほうは正解と思っ

\* 技能五輪：青年技能者の技能レベルを競う技能競技大会。次代を担う青年技能者に努力目標を与え、技能の重要性、必要性を広くアピールし、技能尊重機運の醸成を図ることを目的に開催される。全国大会と国際大会があり、全国大会は中央職業能力開発協会の主催で、毎年開催されている。